

気仙沼市「海洋教育実践記録集2022」の発行によせて



気仙沼市教育委員会 教育長 小 山 淳

気仙沼市は、2011年に発生した東日本大震災において、人知を超える海の力の威力を経験しました。震災から立ち上がる私たちは、復興のキャッチフレーズ「海と生きる」を大切にしてきました。本市においては、この「海と生きる」を心に留め、新たなまちづくりと教育を進めております。

海洋国である我が国にとって、海と共に生きる意識と資質・能力、そして態度を有する人間の育成は重要課題であります。海洋基本法においては海洋に関する国民の理解増進を掲げ、学校教育等における海洋に関する教育の推進が謳われています。震災後数年は近づくことの叶わなかった海での活動の再開とともに、海の素晴らしさや暮らしとのかかわりを、体験を通して感じることができるようになりました。このきっかけとなったのが、「海洋教育」との出会いでした。本市においては、平成26年度より、東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター(旧 東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター)との連携協定により、田中智志センター長をはじめ、同センターの先生方の御指導をいただき、海洋教育に取り組んでまいりました。

また、日本財団、笹川平和財団、東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センターの「海洋教育パイオニアスクールプログラム」に参加し、昨年度までは地域展開部門として3か年取り組み、今年度は発展型の「地域展開・アドバンス部門」として、幼稚園5園、小学校10校、中学校4校が海洋教育パイオニアスクールとして実践を展開してきました。その中で、海洋教育に関する教育課程特例校として鹿折小学校、唐桑小学校の2校が、特設領域「海と生きる探究活動」を中心とした学習を展開し続け、市内の取組を牽引しております。さらに本年度は、海洋教育挑戦園・校(幼稚園1園、小学校2校、中学校1校)を位置付け、ねらいに迫る牽引役として他の推進校のモデルとなる取組を進めてきました。

コロナ禍においても、学校は様々な工夫により海と親しむ活動や海洋教育に係る外部人材から学ぶ活動、オンラインにより国内外と結び、学びを広げ、深める活動を取り入れてまいりました。海洋に関する多様な体験活動をきっかけとして、「海と生きる」とはどのようなことか、学年の段階に応じて考え行動する児童生徒の姿が見られました。

また、昨年度策定した「海洋リテラシー for 気仙沼」と海洋教育副読本「『海と生きる』を学ぶガイドブック」を生かし、本年度は、「海洋リテラシー for 気仙沼」の内容を幼稚園から中学校までの系統的なつながりを大原則ごとに検討してきました。さらに、海洋教育副読本『「海と生きる」を学ぶガイドブック～未来をえがくわたしたち～』活用例として、実践したモデル事例集を作成し、副読本の授業活用を推進してきました。

気仙沼市「海洋教育実践記録集2022」には、本年度の各学校の実践の紹介に加え、各校での海洋教育の位置付けを示した全体計画、海洋教育デザインシート、指導案なども掲載しました。気仙沼市の海洋教育の歩みの記録とともに、海洋教育の価値を各方面に伝え、実践を広げ、深めるための資料として充実した内容となっています。

地域の海や水産資源と環境の結びつきについての理解を深めるとともに、子どもたちにとって豊かな人生の実現につながる資質・能力の育成を図るため、貴重な事例を提供いただいた各園・各校の指導者並びに学習を支えていただいているすべての関係者の皆様に改めて感謝申し上げますとともに、今後さらに気仙沼市の海洋教育が発展していくことを期待しております。